(2)　FD 講演会（令和 4 年 1 月 20 日）
「コミュニケーションデザインとは何か～対話の時代に向けて～」

【企画の趣旨】

アクティブ・ラーニングによる授業においては、教員と学生間、また学生同士の間の対話・コミュニケーションはとても重要な要素です。昨年来のコロナ禍によって、社会全体のオンライン化が急速に進む中、対話・コミュニケーションが希薄になりがちなことが課題として指摘され、その重要性が再認識されています。教育現場においても、遠隔会議システムを利用したリアルタイム授業を行ったり、オンデマンド型の授業では課題のフィードバック等により一方通行的な講義にならないような工夫が求められています。また、学生指導においてもこれまで以上に緊密なコミュニケーションが求められます。

平田先生は、ご自身が劇作家として活躍される一方で、高校生を対象とした演劇ワークショップや大学等での講義、また今年度からは芸術文化観光専門職大学の学長に就任されています。これからの教育に求められるアクティブ・ラーニングとしての「対話的学び」に必要な理論および具体的な手法について、コミュニケーションデザインを通して学ぶ機会としたいと考えます。

【実施概要】

開 催 日： 令和 4 年 1 月 20 日（木）
開催時刻： 14:00～15:30
場　　所：本部棟第一会議室および Teams による遠隔開催
参加対象：大学教職員及び学生
講 演 者：平田　オリザ（ヒラタ　オリザ）先生
　　芸術文化観光専門職大学（学長）
講演タイトル：「コミュニケーションデザインとは何か
　　～対話の時代に向けて～」

【プログラム】

時刻	時間	項目	担当者
13:50～		受付開始	
			司会：麓
14:00～14:05	5 分	開会あいさつ	杉浦理事
		講師紹介	
14:05～15:25	80 分	コミュニケーションデザインとは何か～対話の時代に向けて	芸術文化観光専門職大学学長 平田オリザ先生
15:25～15:30	5 分	閉会あいさつ	

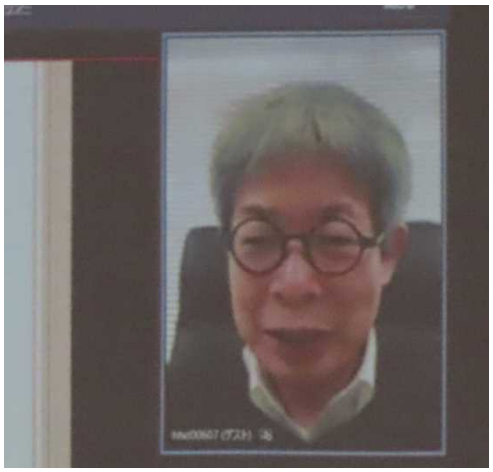
【開催報告】

2022 年 1 月 20 日 全学 FD 講演会「コミュニケーションデザインとは何か～対話の時代に向けて～」を開催しました。

1 月 20 日（木）、オンラインビデオ会議システムを利用した遠隔講演として、教職キャリアセンター「『主体的・協働的な学び』を実践できる教員の養成－アクティブ・ラーニングを導入した新たな学習指導方法の開発－」プロジェクト主催による全学 FD 講演会を開催しました。本学教員・職員・学生計 70 名ほどが参加しました。

講師に芸術文化観光専門職大学長の平田オリザ先生をお招きし、「コミュニケーションデザインとは何か～対話の時代に向けて～」と題して講演を行っていただきました。平田先生は劇作家・演出家として国際的に活躍をされる一方で、小中高校生を対象とした演劇指導や国内外の大学で教鞭を執られるなど、教育においても長年にわたり尽力されています。また、演劇の手法を生かしたコミュニケーション・ワークショップのための著書も多数執筆されています。

講演では、はじめに劇作家としての簡単な自己紹介をされた後、平田先生が大学での授業で古くから実践されているワークショップをもとに進められました。まず、これから私たちが学ばなければいけないコミュニケーション能力について、「何のためのコミュニケーション能力か」「私たち一人一人の時間軸」を横軸・縦軸として捉える必要性について解説されました。次に、演劇における役作りを例に、異文化と接触するときの面白さ、面倒臭さ、また多様な解釈を面白がることが異文化理解に繋がり、人生を豊かにするために身に付けるべきグローバルコミュニケーションスキルに繋がると説かれました。また、「相手の発話の意図としてのコンテクスト（文脈、発言の背景や意図）を理解する」ことの重要性について、医療コミュニケーションに携わったご経験を基に解説されました。そして、子どもや患者に代表される社会的弱者はコンテクストでしか話せないことから、教育における良いコミュニケーションとは子どものコンテクストを受け止めると共に、受け止めているというシグナルを返すことであると述べられました。また、アクティブラーニングにおいては、発話を促すための環境作りが大切であると指摘されました。最後に、「シンパシー（同情）からエンパシー（共感）へ」として、互いのコンテクストを擦り合わせる習慣の重要性と、それを通して一人一人異なる、命の次に大切なものである文化をどのように守るか、また教育において“対話”を学ばせることの意義について語られました。



講師の芸術文化観光専門職大学長
平田オリザ氏
（オンラインビデオ会議システムにて講演）

講演後の質疑応答でも、いろいろな立場からの質問や感想が聞かれました。「共感できるように育てるための方法」についての質問に対して、平田先生は「演劇をすることです」と講演の文脈を引用して助言されました。また「研究においても、資料との“対話”による他者理解が重要でありそのためのコミュニケーション能力が求められることを再確認した」という意見について、大きく頷かれながら社会科教育におけるアクティブラーニングの実践例を挙げられました。最後に、「音楽表現の指導のための助言」についての質問では、「幼児から小学校低学年までは音楽・美術・演劇・ダンスなどの垣根を緩くして一体となった体験が必要」と述べられました。演劇の話題から様々な分野に及び、教育とは、またアクティブラーニングの本質について深く考えさせられた平田先生の講演は、私たちが目指したいアクティブラーニング授業の体験であったと感じました。

講演会の様子

（教職キャリアセンターFD 部門「『主体的・協働的な学び』を実践できる教員の養成－アクティブ・ラーニングを導入した新たな学習指導方法の開発－プロジェクト　麓洋介）

（教務企画課 教職キャリアセンター支援係）

ＦＤ集会の様子

【司会（麓　洋介氏）】　本日、司会をさせていただきます教職キャリアセンターＦＤ部門委員、アクティブラーニングプロジェクトの麓と申します。よろしくお願いいたします。

一昨年からのコロナ禍において、私たちの生活というのは大きく変わり、またそれによって教育現場においても急激な変革というものが求められています。従来のような対面式での授業には様々な制約というのが設けられ、ＩＣＴを活用した遠隔授業やオンデマンドによる授業などもこの２年あまりで本学においても随分定着してきたしてきたかと思います。そのような中、アクティブ・ラーニングにおける「主体的・対話的で深い学び」の実現が難しい状況となっています。また、一方で、学生へのケアという意味でも課題が多く、私自身様々な場面においてどのように対応すべきか悩みながら日々学生と接しています。

両者に共通して言えることとしまして、コミュニケーションをどのように図るかということではないかというふうに考えています。コロナ禍、またコロナ以降における教育の中で我々大学教員が学生とどのようにコミュニケーションを図っていくべきか、また将来教育現場に立つ学生の皆さんが子供たちとどのように接していくべきか、様々な状況下での授業において教員と学生、また学生間での対話をどのように構築するかなど、コミュニケーションデザインの視点から学ぶ、このことは私たちにとって新しい時代のアクティブラーニングの実現にもつながるのではないかというふうに考えています。

このような趣旨から、本日のＦＤ講演会を企画いたしました。講師として、芸術文化観光専門職大学学長でいらっしゃいます平田オリザ先生をお招きして講演をお願いいたしております。

それでは、初めに開会の挨拶を教職キャリアセンター長の杉浦理事よりお願いいたします。

【愛知教育大学理事（杉浦慶一郎氏）】　失礼いたします。

ただいま御紹介をいただきました教職キャリアセンター長の杉浦です。

講演会の開催に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

この講演会、愛知教育大学アクティブラーニングプロジェクトが全学ＦＤとして企画いたしました。新型コロナウイルス感染症の拡大にすさまじいものがあります。オンライン開催で本当によかったなあと今思っているところです。

さて、アクティブラーニングという言葉は、平成26年の中央教育審議会への諮問文に記されて以来、現場の教員に一気に広がったというふうに思っていますけれども、特定の学習や指導の形に拘泥する事態を招くのではないかと、そういう懸念が示されたことから、主体的、対話的で深い学びを実現するために共有すべき授業改善の視点ということでその位置づけが明確にされたというふうに理解しております。授業においては、教員と学生の間、あるいは学生同士での対話、コミュニケーション、非常に大切なものであることは言うまでもありません。本日の講演会は、このことについて学ぶ機会として企画いたしました。

本日御講演をお願いしております平田オリザ先生については、皆さんよく御存じだと思います。劇作家、そして演出家として大変有名でいらっしゃいまして、国際基督教大学在学中から劇団青年団を主宰されておりまして、岸田邦士戯曲賞、モンブラン国際文化賞、フランスの芸術文化勲章シュヴァリエ受勲、あるいは鶴屋南北戯曲賞など数々の賞を獲得されるなど国内外で活躍をされていると、そういう方でいらっしゃいます。そして、演劇の手法を用いた多様性理解、コミュニケーション教育にも取り組まれており著書も多数ございます。

また今年度、兵庫県豊岡市に開学しました芸術文化観光専門職大学の初代の学長をお務めでもいらっしゃいます。

今日は大変お忙しい中、「コミュニケーションデザインとは何か～対話の時代に向けて～」という演題で本学のために御講演をお願いすることができました。本当にありがとうございます。

これからの教育に求められるアクティブラーニングとしての対話的な学びに必要な議論や具体的な手法について、コ

ミュニケーションデザインを通じて学ぶ機会になるだろうと思います。

平田先生、どうぞよろしくお願いいたします。

【司　会】　それでは、平田オリザ先生に講演いただきたいと思います。

御準備のほうはよろしいでしょうか。

講演に移る前に、１点だけ御容赦いただきたいことがございます。本ＦＤ講演会は録画、録音をしております。終了後は報告書としてまとめる予定です。その際に、質疑応答内容を記載させていただきますが、発言者個人のお名前が出ることはありませんのでどうぞ御遠慮なくたくさんの御意見、御質問をいただければと思います。

それでは、平田先生、講演のほどどうぞよろしくお願いいたします。

「コミュニケーションデザインとは何か」～対話の時代に向けて～

芸術文化観光専門職大学
学長　平　田　オリザ

こんにちは、平田です。よろしくお願いいたします。

御紹介いただいたように、私、本業は劇作家ですので、少しだけ自己紹介のスライドも持ってきました。

これはまだ学生さんは生まれた頃かと思いますが、2002年の日韓共催のサッカーワールドカップの記念事業で、日本と韓国の両方の国立劇場で合同で作った作品です。日本の俳優さん６人と韓国の俳優さん５人に出ていただいて、日韓両国で大きな演劇賞を受賞する作品になりました。

これは私の代表作で「東京ノート」という今14か国語ぐらいに翻訳されて世界中で上演していただいている作品なんですけど、それの日韓版ですね。手前の２人は韓国の俳優さん、奥の２人は日本の俳優さんです。これはそれのフランス語版ですね。フランスの国立劇場で作った作品です。「《台北筆記》Taipei Notes」となっています。台湾に舞台を翻案して作った作品です。

こういった国際共同の仕事が多いんですけれども、一方で、大阪大学に長くおりましたので、大阪大学ではこういったロボットを使った演劇とか、こちらはアンドロイドですね。こちらはアメリカ人の女優さんですけれども、皆さん、テレビでマツコロイドって御覧になったかと思うんですが、あれを作った石黒浩先生というちょっと危ない教授が大阪大学におりまして、彼と一緒に10年以上いろんな作品を作って世界中を回ってきました。

今日は愛教大での講演ということで、教育に関心のある方も多いかと思うんですけど、例えばこのアンドロイド演劇、30分ぐらいなんで、たしか愛教大附属の岡崎の中学校でしたかね。上演したことがあって、それでその後に、人間とは何かとかロボットと人間の境、境界線というのはこれからどうなっていくのかというようなことを中学生とまさにアクティブラーニング、探究型の授業で対話をするなんていうこともやってきました。これはよく理科教材としても使われているものの一つです。

これはオペラですね。これはドイツのハンブルグの国立歌劇場で作ったオペラですけれども、これは福島が舞台になっていまして、最後、防護服を着てお墓参りに行くシーンで終わるんですが、ヨーロッパでこういうオペラの演出なんかもしております。

一応作家なんで、小説とかも書いていまして、数年前にももクロ主演で映画化されたんで、もしかしたら御覧になった方もいらっしゃるかもしれません。

今年、兵庫県豊岡市というところにできました芸術文化観光専門職大学の学長に就任いたしました。兵庫県立の大学になります。日本で初めて国公立で演劇やダンスの実技が本格的に学べる大学というのが売りになっています。

それから、小学校、中学校の国語の教科書を作るお手伝いをずっとしてきましたので、今も大体年間30校から40校ぐらいはこういった小学校、中学校に行って実際に授業をしています。大学でも、こういったワークショップ形式と呼ばれる授業を国内外でずうっと続けてきました。

ちょっと今日はどんな授業を大学でしているかという御紹介から話に入っていきたいと思うんですけど、これは私が一番古くから使っているテキストの一つで、電車の中という設定になっていて、このＡさんとＢさんは知り合いなんですね。そこにＣさんがやってきて「旅行ですか？」と声をかけると、こういう簡単なスキットといいますけれども、こういうものをよく使います。

簡単に見えるんですけど、日本の高校生や大学生がやると意外と難しくて、妙になれなれしくなってしまったりとか、初対面のはずなのに「旅行ですかあ？」みたいになっちゃったりとか、あるいは逆に一生懸命に聞き過ぎて「旅行です

か！？」とか聞いちゃったりするんですね。

最初のうち、何でうまくいかないのかよく分からなかったんですね。もう25年ぐらいこういう仕事をしているんですけど、それまではプロの俳優としか仕事をしたことがなかったので高校生に聞いてみたんですね、これどうしてうまくいかないのかなあと。そうしたら、私たちは初めて会った人と話したことがないからと言うんですね。最初は誰でも初対面だろうと思うんですけど、要するに他者との接触が少ないということですよね。その後、カルチャーセンターとかでも教えるようになったんですけど、そういうところでも結構苦手な方が多いということが分かってきました。

それ以来、参加者に聞くようにしているんですけど、ちょっと今日も会場の方、手を挙げていただきたいんですが、まあ、そもそも列車の長旅がもう大学生はあんまり経験がないですね。特にこのコロナでずっと旅行も行っていないと思うんですけど、私たちが学生の頃は東京とか名古屋の大学生が北海道や九州へ旅行に行くのに10時間ぐらい列車に乗るというのは当たり前だったんですけど、今は飛行機のほうが安くて早いですからあんまりこういう経験もないと思うんですが、皆さん、コロナが明けたら海外に行きたいと思っている人は多いと思うんですよね。そのときに飛行機に乗りますね。隣に知らない人が座ったとします。そのときに、自分から話しかけるという人もいると思うんですね。それから、自分からは話しかけないなあと。話しかけられれば答えるけれども自分からは話しかけないなあという人もいると思うんですね。それから、場合によるという人もいると思うんですけど、ちょっとこの３つで手を挙げてみてください。いいですか、「話しかける」「話しかけない」「場合による」です。

じゃあ自分は話しかけるほうだという人。いないですかね、ちょっと小さい画面で見えないんですが。いらっしゃいましたね。はい、ありがとうございます。これ大体全国平均１割なんです、日本では。社会人でも。話しかける方がですね。大体全国どこへ行っても１割なんですけど、大阪だけちょっと上がるんですけどね。僕の国内最高記録は富田林の７割というのが最高なんですけど。

では、自分からは話しかけないという方。これは結構いますね。そうですね。はい、分かりました。

では、場合によるという方。場合による、多いですね。じゃあちょっと場合によるの方、手を挙げていてください。そのまま手を挙げていてください。じゃあ場合によるの方、どんな場合に話しかけますか。どうぞ、前のほうの方から言ってみてください。これ、声拾えますか。

【会場Ａ】　私でしたらば、隣の方があまり怪しくなさそうであれば話しかけることがございます。

【平田氏】　怪しくなければですね。はい、いい答えですね。ほか、いかがでしょうか。あと２人ぐらい聞いていただきたいです。大体こういうとき、場合によるの人、手を下げちゃうんですけど。どうぞ。

【会場Ｂ】　行き先が一緒だと情報を聞きたいので話しかけます。

【平田氏】　そうですね。実はこれ、列車よりも飛行機のほうが話しかける率が高いんですね。行き先がもう同じというのは分かっているので。はい、ありがとうございます。ほかはどうでしょうか。もうお一方ぐらい。

【会場Ｃ】　話しかけたらちゃんと答えてもらえそうかなとか、そういう感じで。

【平田氏】　はい、ありがとうございます。

そうですね。やはりこれ話しかける主体のＡさんの体調とかももちろんあると思うんです。あんまり落ち込んでいるときは話しかけないと思うんですけど、やはり皆さんおっしゃっていただいたように、Ｃさん、相手によるわけですよね。話しかけるというふうに手を挙げた方でも、相手が物すごく怖そうな人だったらこれは話しかけないと思うんですよね。それから、話しかけないというふうに手を挙げた学生さんとかも多いと思うんですけど、このＣさんが赤ん坊を抱いていて、赤ちゃんがじゃれついてきたりしたら、これ何か言いますよね。かわいいですねとか、かわいくなくても何か言わないと今度こっちが怖い人だと思われちゃうんで何か言うと。要するに相手によるわけです。

これは全く同じワークショップをオーストラリアの大学でやったときに、どんな場合に話しかけますかと聞いたんですね。そうしたら、人種や民族によるという答えが返ってきます。やっぱりワークショップっていろんなところでやって

みるもんだなあと思ったわけです。ただこれは相手によるんではなかったんですね。こちら側、話しかける主体のＡさんがイギリスの上流階級の教育を受けた男性だったらば話しかけないんじゃないかと言うんですね。だからあいつらはお高くとまっているんだと、オーストラリア人のイギリス人に対する偏見も明らかに入っていると思うんですけど、そういうマナーがあることは事実なんですね。

一方で、皆さんも御経験のある方も多いと思いますけど、アメリカとかオーストラリアってやたら話しかけてくるわけですよね。アメリカでも、東部よりも中西部、西部のほうが圧倒的に話しかけてくる。これは開拓からの歴史が浅くて、自分が相手に対して安全な人間だということを、先ほど、安全そうだと、怪しそうじゃなかったらと言いましたけど、これは相手も同じことを思っているわけですから、自分が相手に対して安全な人間だということを早く示さなければならないような風土が残っているところでは、やはり話しかけてくるんだと思うんですね。

僕はよく学生さんたちに説明するのは、アメリカでホテルに泊まってエレベーターで他人と乗り合わせて無言ということはないわけですよね。「Hi」とか「How are you」とか何か言うと。日本人はどうですかね。エレベーターに乗るとみんな上の表示を見ますね。見ないでも上っていくんだけど何となく見てしまう。

じゃあエレベーターで話しかけるアメリカ人は大変コミュニケーション能力が高くて、話しかけない日本人はコミュニケーション能力のない駄目な民族なんでしょうか。そういう話でもないと思うんですね。アメリカという多民族国家は、小さな空間にいろんな人が閉じ込められると、早く自分が相手に対して敵意を持っていないということを声や形にしてはっきりと表さないとストレスで緊張感がたまってしまう社会なわけですね。日本はどちらかというと島国、村社会でのんびり暮らしてきましたから、そういうことを声や形にして表すのは野暮だという文化の中で育ってきました。皆さんも、ホテルならともかく、デパートのエレベーターの中とかで他人からいきなり声をかけられたら緊張しますよね。何か売りつけられるんじゃないかとか思いますね。要するに、緊張する局面が日本とアメリカでは真逆になっていることが分かりますね。これは文化の違いとしか言いようがないわけです。文化の違いであるならば、よしあしではないし、まして優劣ではないので、これを卑屈に思う必要はないと。

ただ、もう皆さんも、学生さんたちですね。薄々気がついていると思うんですが、日本もそうも言っていられない社会になってきたということなんだと思うんですね。このそうも言っていられないというのを、教育に携わる私たちはきちんと場合を分けて、問題を切り分けてコミュニケーション教育というのを考えていかなきゃいけないんじゃないか。

僕はよく縦軸と横軸で考えましょうというふうに言います。横軸というのは、何のためのコミュニケーション教育なのか、あるいはコミュニケーション能力なのかということですね。皆さんの中で、これから一生外国には出ません、外国人とは話しませんという人はいないと思うんですね。やっぱり外国に出ていくときには、私たち日本人は少数派ですから、その国際的なコミュニケーションのルールというのはある程度やはり知っておいたほうがいいでしょう。一方で、去年だったかな。愛知県の人権の集いに呼んでいただきまして、多文化共生社会に向けての講演会をしたんですけれども、愛知県は特に外国人の方が多い県ですよね。これが今は全国平均でいうと３％ぐらいなんですが、恐らく30年後、50年後には少なくとも１割から２割にはなっていくだろうと。ならなかったら日本は滅んでしまいますからね、人口が急激に減っていって。

そうすると、今度は向こうから来ていただく方たちが少数派ですから、この少数派をどう受け入れていくかという別の課題が出てきます。これはやっぱり違うコミュニケーション能力が要求されると思うんですよね。

さらには、日本人同士でも価値観が多様化していきますから、今までのようにそこはちょっと察してよとか、日本人なら分かってよ、そういうコミュニケーションだけでは社会がもたなくなってくる。きちんとやっぱり言語化する能力が必要になってくるということですね。こういうふうに、何のためのコミュニケーション能力かということをきちんと捉えなきゃいけない。

もう一つ、縦軸ですね。これは皆さん一人一人の時間軸です。

例えば、高校生だったらば今はＡＯ入試や推薦入試でもコミュニケーション能力を問うような試験が増えてきていますから、入試のためにそれが必要なのかもしれない。あるいは、皆さんは今大学生として様々なディスカッション型の授業が多くなっていると思いますので、そういったものに堪えるための能力も必要かもしれない。さらに就職ですよね。特に教員になる場合には、これもコミュニケーション能力は必須なわけですから、そういうものも必要になってくる。

ただ、コミュニケーション能力というのは受験とか就活のためにあるわけではないですよね。企業だって、別にその準備をしてきた人を採りたいわけではなくて、潜在的にそういう能力がある人が採りたいわけです。

それよりも皆さんが10年後、20年後、あるいは30年後にどういう家庭が築きたいのかとか、１人で生きるのかとか、あるいはどういう地域に行きたいのかとか、そういうことによっても要求されるコミュニケーション能力は違ってくると思うんですよね。そういった個別の未来ですね。そういったものも今、じゃあそこから逆算してどんなコミュニケーション能力を培っていかなきゃいけないのかということに関係してくるんじゃないかと思います。いずれにしても、この縦軸と横軸をきちんと捉えて、自分には今どんなコミュニケーション能力が必要なのかを考えていかなきゃいけない。

文部科学省が今言っているようなグローバルコミュニケーションスキルなんてものは、あんなものは恐るるに足らずなんです。あれはグローバル、グローバルと言っていますけど、アメリカンコミュニケーションスキルですからね。要するにビジネスの中心がアメリカなので、そのマナーは学んでおきましょうということです。マナーですから、覚えておけばいいんですね。ナイフとフォークの使い方を覚えるように、アメリカでホテルに泊まってエレベーターに乗ったら「Hi」「How are you」と言っておけぐらいに覚えておけばいいんですね。そんなものは恐るるに足らずだと。

本当に恐れなきゃいけないのは、本当に私たちが謙虚にならなきゃいけないのは、この文化の多様性のほうなんだと思うんです。コミュニケーションの多様性のほうなんだと思うんです。アメリカではエレベーターに乗ったら「Hi」「How are you」と言わないと失礼になる。でも、同じ英語を使っていても、イギリスのある階級に行ったら話しかけたら失礼になってしまうんです。こんなことを全部覚えておくことはできないですよね。あるいは、覚えるのはＡＩ、人工知能に任せればいい。後は検索さえできればいい。

だとすると、人間がこれから持たなければいけない能力というのは、次に行く国はどんなコミュニケーションを取るんだろうという好奇心と、そして自分の文化を押しつけない謙虚さのほうなんだと思うんです。これが本当の意味でのグローバルコミュニケーションスキルなんではないかと。

その前提でちょっと今日の話も聞いていただきたいんですが、少し話を元に戻しますと、アメリカやオーストラリアはよく話しかけると。イギリスは同じ英語を使っていても、古い社会なので住んでいる場所とか階級によって随分英語が違いますね、イントネーションとか。恐らく、相手を紹介してもらわないとちょっと話しかけにくい言語なんじゃないかということなんです。

そう考えていくと、日本語とか韓国語もちょっと話しかけにくい言語で、日本語や韓国語は敬語が複雑に発達していますから、相手との関係が定まらないとちょっと話しかけにくいんですね。

韓国語は、特に年齢による敬語が厳しいんですね。日本人はどちらかというと社会的な関係で敬語が決まるんですが、韓国ではどちらかというと年齢が優先されます。いずれにしても封建社会ならこれでよかったんですね。関係が固定されていますし、みんな知り合いですから。

しかし、私たち、今同世代の人と初対面で会うなんていうことはしょっちゅうあります。そうすると本当に困るんです、私少し韓国語をしゃべるもんですから本当に困るんですね。ただ、言語というのはうまくしたもんで、韓国語の場合には相当早い段階で相手の年齢を聞くという習慣があります。大体挨拶のすぐ後ぐらいに、何年生まれですかと聞きます。向こうは数え年なんで、満年齢と数え年でまた誤解が起こるとまずいので、大体お幾つですかではなくて何年生まれですかと聞きますね。たまに干支で聞いてくる人がいるんですけど、これ干支で１周間違えるとますます悲惨なことになりますから、大体何年生まれですかと聞くんですが、これって男性同士はいいんですけどやっぱり女性には聞きにくいですよ

ね。かつては、韓国の女性は年齢を聞かれるのを嫌がらないといったものなんですけど、今はもちろんそんなことはありませんので。

これ逆のこともあります。日本から韓国に行く観光客の８割は女性と言われているんですが、韓国に遊びに行った日本女性が、いきなり年齢を聞かれて不愉快な思いをしたというような報告がよく政府観光局に届けられます。でも、これしようがないんですね。年齢を聞かないとコミュニケーションが取れないような言語構造になっているので。こういうふうに話しかけるという行為一つとってもお国柄とか民族性とか国民性というものが表れるということなんですね。

例えば、アイルランドという国でワークショップをしたときには、いきなり全員が話しかけるというほうに手を挙げたんですね。だから「場合による」という話さえできなくなっちゃったんです。アイルランドって本当に気さくな国で、パブで立ち飲みでギネスビールを飲んでいるとみんな話しかけてくるんですね。でも、イギリスとアイルランドなんて隣の島でしょう。こんなに違うわけですよね。私たちは欧米と一くくりにしがちですけれども、欧米の中にもいろんな民族、いろんな人種がいて、話しかけるかかけないかという傾向が出るということです。

このネタは私、もう20年以上しゃべってきたんですけれども、数年前にエクスペディアという世界的な旅行会社が、機内で隣の知らない人に話しかけるかどうかのアンケート調査をしてくださいました。これは別に私が頼んだわけではありません。たまたまです。本当にたまたまです。

見事に日本は15％。私、先ほど大体１割ですと言いましたけれども、まさにその知見が合っていたんですね。20年間自分でやってきたことが、こんな統計上証明されるって滅多にないことだと思うんですけれども、合っていました。この統計で一番多いのはインド人の60％ですね。富田林はすごいですね、インド人より話しかけるということなんですけど。

こういうふうに話しかけるとか、コミュニケーション一つとっても民族性とか国民性とかがあるので、普遍的なコミュニケーション能力なんて逆に言えばないということなんです。話しかければいいっていうものでもないということなんですよね。

さて、私たち演劇人は台本をもらうと、何となく役づくりというものをします。例えばＡさんになったら、この人は上品な人なのかなあ、がさつな人なのかなあ、教養のある人なのかなあ、ない人なのかなあ、いろいろ考えながらセリフを言います。

今は「旅行ですか？」というセリフが問題になりました。これは簡単なセリフですね。英語に翻訳しても韓国語に翻訳しても、意味の取り違えようのない簡単なセリフです。

でも、そもそもＡさんが何人なのか、あるいはこの台本を書いたのがどこの国の人なのかによって、この「旅行ですか？」というセリフの書かれた意味は随分違ってきます。いいですか。セリフの意味は同じなんですけど、セリフの書かれた意味が随分違ってくる。もし、このＡさんがアイルランド人だったら、これ普通のアイルランド人ですよね。みんな話しかけるんですから。

この間、フィリピンから来た留学生に聞いたら、このシチュエーションで話しかけなかったら失礼だと言っています。120％話しかける。イタリアから来た留学生に聞いたら、相手が女性だったら100％話しかけると言っています。でも、これも彼らはマナーだと言い張るんですね。おばあちゃんでも話しかけるんだと。相手を女性と認めていないことになるから、私たちは話しかけざるを得ないんだと言い張ります。これはずるいマナーだと思いますけど。

さて、日本人は１割しか話しかけないんです。ということは、皆さんがこのＡさん役になったら、ちょっと積極的な人、ちょっと図々しいぐらいの人という役づくりをしないと、恐らくこのセリフはうまく言えないということなんですね。

さて、またクイズです。皆さん、ちょっと考えてください。聞きますので。

このＡさんがイギリスの上流階級の教育を受けた男性だったとします。ということは、今度は話しかけちゃいけないんですよね。マナーとして。でも台本には「旅行ですか？」と書いてある。ということは、この劇作家は何か別のメッセージをこの「旅行ですか？」というセリフに込めていることになります。じゃあどんなメッセージが考えられますか。何で

この人はわざわざ「旅行ですか？」と、マナーを破ってまでも「旅行ですか？」と言ったんでしょうか。どなたか、思いつく方、手を挙げて言ってみてください。はい、どうぞ。

【会場Ａ】　警察の調査です。

【平田氏】　Ａさんが警官だった。

【会場Ａ】　いや、話しかけるほうが。ですから、上流階級の方でもちょっと事件捜査のために話しかけなければならないというシチュエーションをちょっと今想像しました。

【平田氏】　すばらしい答えですね。ただいきなり何かそういうことは言えないので、まず「旅行ですか？」から話しかけてみたということですね。はい、すばらしいですね。こんな感じで結構です。ほか、どうでしょうか。どうぞ、オンラインの方でも結構ですよ。ミュートを外して言っていただければ。会場の方でも。どなたかいらっしゃいませんか。もうあとお一人、お二人お願いしたいんですけど。何でこのＡさんはわざわざマナーを破ってまでも話しかけたんでしょうか。

【会場Ｂ】　どうしても伝えたい内容があるので、最初に「旅行ですか？」と。

【平田氏】　ああ、その内容をちょっと考えいただきたいと思いまして。内容をちょっと考えていただきたかったんですけど。ほかの方、いかがでしょう。オンライン上の方でも結構ですよ。

【会場Ｄ】　口元が、ノリとかついていて、恥かいちゃうから今指摘しようかなと。

【平田氏】　直接は言えないので、まず「旅行ですか？」と。ああ、すばらしい答えですね。ただ、それでマナーを破ってまでも聞くかどうか微妙なところだと思いますけど、ユーモアとしてはとてもいいと思いますね。ほか、いかがでしょう。

【会場Ｅ】　例えば、切符が落ちていて、それを拾って誰かを探していた。

【平田氏】　ただそれだと、それは「旅行ですか？」とえんきょく表現にする必要があるかどうかということになりますが、とてもいい答えだと思います。ありがとうございます。今日はちょっと時間が限られているのでこのぐらいにしておきますが、これ国語の立体化と呼んでいる授業で、いろんな高校でもやってきました。要するに、今までの従来型の国語の授業ですね。この作者の言いたいことは何でしょう、50字以内で答えなさい。マルかバツかみたいな授業ではなくて、要するに文化的な背景が違えばいろいろな解釈が起こり得るんだと。その解釈はある種の文化的な背景をバックグラウンドにしているので、決して間違いとは言えないというようなことを体感してもらう授業です。実際にはテキストを使って動いてみると、高校生たちはいろんなことを感じていろんなアイデアを出して、実際にこれをまた演じてみるというようなことをやります。

例えば、よくある答えとしては、当然このＣさんがＡさんの好みの女性だったと。要するに、マナーを破ってまでも話しかけたいぐらい一目ぼれをしたとか、あるいは先ほどの警察のにちょっと似ているんですが、Ａさんが身分を隠す必要があった。スパイとかでですね。そのために庶民のふりをしてわざわざ「旅行ですか？」と言ったとかですね。あるいは、今ＢさんとＡさんの関係がちょっと悪くなっていて、Ｂさんへの当てつけでＣさんに「旅行ですか？」と話しかけたと。いろんな答えが高校生からも出てきます。

先日、ある高校で非常に面白い答えがありました。Ａさんがばかという答えがありました。Ａさんはイギリスの上流階級の教育を受けたんだけど、ばかだから話しかけちゃった。これまず発想がいいですね。皆さん、一生懸命話しかける理由を考えてきたんだけど、単純に能力の問題だと。

それから、御承知のように、例えば大学入試でも、この作者の言いたいことは何でしょう。50字以内で答えなさいみたいな設問から、このＡさんはイギリスの上流階級の教育を受けた男性です。本来ならば話しかけてはいけないはずなのに話しかけています。なぜ話しかけたんでしょう。５つ可能性を上げなさいみたいな設問にこれからどんどん変わっていくわけですよね。もしこれが大学入試の設問であったとしたら、イギリスの上流階級の教育を受けたとしか書いていないわ

けですから、教育を受けたからといって能力が備わるとは限らない。要するに、問題文に対しても批評性を持った非常にいい答えという扱いになります。

さらに面白いのは、このシチュエーションをイギリスの観客が見ていたら「旅行ですか？」の言い方次第で爆笑になるかもしれないんですね。要するに、この貴族のぼんぼんのばか息子のＡさんが、無理して旅行に出てきた珍道中が始まるんだなという情報をイギリスの観客なら得るかもしれない。あるいは、さっき言ったように、Ｃさんをすごいきれいな女優さんとかが演じていたら、あっ、この後、ＡさんとＣさんの身分を超えたラブロマンスが始まるんだなという情報をイギリスの観客なら得るかもしれない。日本人はそんなことを思いもしないですよね、身分による言語差がそんなにないですから。私も思いもしませんでした。私が書いた台本ですけど。これが異文化と接触するときの面白さであり、ちょっと面倒くさいところです。全く違う解釈が起こるということなんですよね。

私、東京芸大の教授も長くしていたんですが、芸大というのは音楽と美術の最高峰の学生たちが全国から集まってきます。将来的には、国際的に活躍するアーティストになりたいとみんな考えています。そのときに、彼らによく言うのは、やっぱりそうはいっても向き不向きがあるんだと。国際的に活躍できるかどうか、向き不向きがあるんだという話をします。

向いていない人というのは、こういう全く異なる解釈とかに直面したときに、何で分からないんだよと切れちゃったりとか、あるいはそれが繰り返されると、どうせ分からないだろうと諦めちゃったりする。向いている人というのは、こういうことが楽しめる人なんですよね。そんなふうに思うの、面白いねえと。俺、全然そんなふうに考えなかったよと。じゃあ次こうしてみようかと。

せっかくなら、若いうちに異文化とたくさん接触してこういうものを楽しめる人になってくださいというふうに学生にはよく言うんですけれども、これよくよく考えると、先ほどの話につながるんですが、こういった異文化理解能力、グローバルコミュニケーションスキルというのは、別に国際的に活躍するアーティストになるためにつけなきゃいけない能力というわけでもないと思うんですね。それよりは、やはり皆さんの人生を豊かにするためにある能力なんだと思うんです。今学生さんたち、二十歳前後とかだと思いますけれども、そうすると、大体あと60年ぐらい生きなきゃいけないんですね、日本人の平均寿命からいって。この60年の間に、先ほども申し上げたように、日本にはどんどん外国の方、日本語を母語としない方が増えてきます。そのときに、一々何でそう思うんだよと切れていたりとか、どうせ分からないだろうと諦める60年間と、そんなふうに思うの、面白いね、楽しいね。異文化ってちょっと面倒くさいけどやっぱり楽しいねと思える60年と、どっちがいいですかという話なんですよね。

ですから、その残りの人生を豊かにするためにはやっぱりこのグローバルコミュニケーションスキルというのは、これから全ての日本人が持っていかなきゃいけない能力なんじゃないか。就職のためとか受験のためとか、仕事のためではなくて、人生を豊かにするためのコミュニケーション能力というのが非常に重要なんじゃないかということです。

さて、皆さんはもう何十年か生きてきて、話し言葉の個性というのがあります。先ほど手を挙げていただいた、話しかけるか話しかけないかも皆さんの個性ですね。それから、言葉から受けるイメージというのも人それぞれ、様々です。こういうものを社会言語学なんかではコンテクストというふうに呼びます。

コンテクストは受験英語では文脈と習うわけですけれども、ここではもうちょっと広い意味で、どんなつもりでその人がその言葉を使っているかの全体像だと思ってください。

俳優には俳優のコンテクストがあります。劇作家には劇作家のコンテクストがあります。これが重なれば苦労しないんですけど、そう簡単には重ならないと。今問題になっているのは「旅行ですか？」というセリフです。簡単なセリフですね。でも、高校生が言うとうまく言えない。うまく言えなくて当然なんですね。高校生からすると、それは簡単に見えるけど、ふだん使っていない言葉なわけです。高校生、９割方は話しかけないというほうに手を挙げますので。もっと簡単に、大ざっぱに言うと、その子のコンテクストの外側にあるセリフだということです。このように簡単に見えて、コンテ

クストの外側にあるセリフのことをコンテクストのずれと呼んできました。

このコンテクストのずれは、コンテクストの違いに比べてもコミュニケーションの落とし穴になりやすいんじゃないかということなんですね。違いって何かというと、文化的な背景がはっきり違っていれば、もうちょっと皆さん気をつけると思うんです。例えば、チェーホフさんという作家がいます。チェーホフさんはシェークスピアの次に有名な劇作家で、130年前のロシアに生きていました。130年前のロシアに生きていましたから、私たちには全然意味の分からないセリフが出てきます。例えば「銀のサモワールでお茶を入れてよ」なんていうセリフが出てきます。もし、台本の中に「銀のサモワールでお茶を入れてよ」というセリフが出てきたら、みんな考えますよね。あるいは検索しますよね、サモワールって何だろうと。

ところが「旅行ですか？」は考えないですよ。え、旅行ですかって何とか、旅行ですかってどう言えばいいのと考えないですよね。意味が分かってしまうから。で、ぽろっと言って失敗すると。要するに、演劇というのは他人が書いた言葉をどうにかして自分の体から出てきたかのように言う技術なので、「旅行ですか？」も「サモワール」も同じように難しいはずなんですが、難しさに気がつけない分、日常的な会話のほうが実は難しいということなんですね。

これをふだんの人間同士のコミュニケーションに落とし込んでみると、要するに相手が自分と同じイメージを持ってくれているだろうと思うところに落とし穴が起きやすいということなんです。異文化だったらば一応私たちは身構えて、分かるかなって考えながら一生懸命説明するんですが、なまじ近い文化だとその努力を怠ってしまうということなんですね。

さて、チェーホフは130年前ですけど、もっと最近の事例で、テネシー・ウィリアムズという作家がいます。この人は20世紀のアメリカを代表する作家ですけれども、1950年代に日本に初めて紹介され始めました。そのときに、「ボウリングに行こうよ」というセリフがあったんですね。1950年代ですから、日本の俳優さんたちはボウリングを見たことがありませんでした。翻訳した先生のところに聞きに行って、ボウリングって何ですかと聞きに行ったんですね。でも、翻訳した先生も、今みたいに自由にアメリカに行ける時代ではなかったのでボウリングを見たことがなかったんですね。辞書で調べて、どうもボウリングというのは鉄の玉で棒を倒す遊びらしいよと伝えたそうなんですけど、これじゃあボウリングの意味は分かりますけどボウリングのイメージはちっともつかめないし、まして「ボウリングに行こうよ」というセリフのコンテクストは全然分からないですね。

劇作家が「ボウリングに行こうよ」というセリフを書くということは、ボウリングに行くことが大事なんじゃないんです。舞台上の２人は、ボウリングに行こうと言い合う間柄なんですよという情報を客席に伝えたいんです。

今、皆さんは御自身がボウリングをするしないに関わらず「ボウリングに行こうよ」って大体どんなときに使うかイメージできますよね。だって、初対面の人に、つかぬことをお伺いしますが、今日ボウリングに行きませんかとは言わないですよね。あるいは、18歳の男の子が17歳の女の子をデートに誘うのに、今日ちょっと将棋指さないとは言わないですね。言ってもいいけど、言われた女の子は困りますよね。これ今何に誘われているの私と思いますね。これはボウリングじゃなきゃ駄目なわけです。これが「ボウリングに行こうよ」というセリフのコンテクスト、書かれた意味、伝えたい情報です。

このコンテクストを理解するコンピューターやロボット、今各社、開発にしのぎを削っています。なぜなら、コンピューターはこの行間を読む、文脈をつかむというのがちょっと苦手なわけですね。

またちょっとクイズを出します。クイズなので、またよく聞いていてください。

皆さん、小学校１年生ぐらいの子供がいると思ってください。その子が学校からうれしそうに走って帰ってきました。「お母さん、お母さん、僕今日宿題をやっていかなかったんだけど、平田先生、全然怒らなかったんだよ」と言ったとします。さあ何と答えますか。これちょっと学生さんに、ランダムに３人ぐらい答えていただきたいので指してください。お願いします。学生さんに聞いてください。マイクを向けちゃってください、強制的に。はい、どうぞ。「お母さん、お

母さん、今日僕宿題をやっていかなかったんだけど、平田先生、全然怒らなかったんだよ」、はい、何と答えますか。ぱっと。

【会場Ｆ】　よかったね。

【平田氏】　よかったね、優しいお母さんですね。じゃあお隣、いかがですか。

【会場Ｇ】　怒られないのはよかった、うれしかったかもしれないけど、自分のためにはちゃんとやったほうがいいんだよ。

【平田氏】　ちょっと厳しめですね。もう一方ぐらいどうですか。学生さん。

【会場Ｈ】　先生が何で怒らなかったのか分かるって、ちょっと質問します。

【平田氏】　今の口調はちょっと厳しめですね。

はい、分かりました。ありがとうございます。これ今日、実はこのお三方の答えは私が期待していた３つのパターンを全部言ってくださいました。

まずコンピューターの話をします。コンピューターにこの文章をインプットすると、主に２つの情報が伝わります。１つは、宿題をやらなかった。もう一つは、にもかかわらず怒られなかったです。コンピューターは過去の情報からしか答えが出せないので、宿題をやらなかったに対しては宿題やらなきゃ駄目という２番目の方ですね。厳しめの答えが返ってきます。宿題やらなかったのに怒られなかったのほうに重点を置くと、最初の方の答えですね。よかったね、もうかったねという答えが返ってきます。

でも、子供が本当にお父さん、お母さんに聞きたかったことは何でしょう。これクイズだと言ったのは、引っかけ、落とし穴があるんですね。落とし穴は、うれしそうに走って帰ってきたという部分です。うれしそうに走って帰ってきてまで、宿題をやらなかったのに怒られなくてもうかっちゃったよということを伝えたいひねくれた小学校１年生は多分あんまりいないと思うんですね。本当にお母さん、お父さんに伝えたかったのは、平田先生大好きとか、平田先生優しいとか、平田先生のクラスでよかったという気持ちを伝えたかったんじゃないか。そう考えないと、うれしそうに走って帰ってきたという部分との整合性が取れなくなってしまうからです。

いいコミュニケーションというのは、基本的にこの子供のコンテクストを受け止めて、さらに受け止めているよということをシグナルとして返してあげるのがいいコミュニケーションというふうに言われています。

もちろん子育てや教育に一般的な回答なんてないのですが、クイズだと言ったので答えをつくるとすれば、平田先生優しいね。でも、明日は怒られるかもよと言ってあげるのが一番いいとされています。

これ先に宿題の話をしちゃうと、子供はきょとんとしちゃうんですね。子供は今全く宿題の話ししているつもりないわけです。お母さん、お父さんと平田先生について話したいんですね。だから、実は３番目の方のお答えはとてもよかったんですね。先生に言及した。そうすると話す気、いや、そうじゃないよ。いつも優しいんだよとか、ちゃんと分かってくれているんだよみたいな答えがちゃんと子供の中から帰ってきます。逆に、宿題の話ばっかりをしていると、ああこの大人は全然自分の言うことを聞いてくれていないなあというふうに思われてしまうわけですね。

これ医療コミュニケーション、私、大阪大学ではどっちかというと医療コミュニケーションのほうとかをやっていたんですけど、医療コミュニケーションなんかも同じで、駄目な看護師さんというのは分かりやすいですね。患者さんが胸が痛いんですと。大変だ、先生呼んできますと自分もパニックになっちゃうような人。普通の看護師さんは、胸が痛いんですというと、いつから痛いんですか、どう痛いんですかと聞くと。ところが、患者さん受けのいい、コミュニケーション能力が高いとされる看護師さんはそうしないそうなんですね。胸が痛いんですと言うと、あっ、胸が痛いんですね、まずおうむ返しに答える。要するに、その答えによって、今忙しそうに見えていたかもしれませんが私は今あなたの話を聞いていますよと。あなたにだけ集中していますよということをシグナルとして出してあげる。そのことで患者さんのパニックを抑える。そういう暗黙知を持っているということなんですね。

あるいは、こういう話もあります。ホスピスで、ホスピスは御存じですね。末期がんの患者さんが入る終末医療の機関です。50代の働き盛りの男性が入院してきました、余命半年と宣告されて。奥さんが付きっきりで看護するんだけれども、ある解熱剤を投与するんだけどなかなかこれが効かない。奥さんが看護師さんに、何でこんな薬を使わなきゃいけないんですかと聞くわけです。そうすると、ホスピスに集まっているような優秀な看護師さんですから、こうこうこういう薬なんだけど、こっちとの副作用でなかなか効かないんでもうちょっと頑張りましょうねと懇切丁寧に優しく説明をする。奥さんはその場では納得するわけです。でも、翌日になるとまた同じ質問をする。また一生懸命答える。これが毎日繰り返されるわけです。そうすると、幾ら優秀な看護師さんでも人の子ですから、だんだん嫌気が差してきますね。ナースステーションでも問題になり始めます。ところがある日、ベテランのお医者さんが回診に行ったときに、病室を回ったときに、やっぱり奥さんが何でこんな薬を使わなきゃいけないんですかと聞いてきたわけですね。お医者さんは、それまでそういうことが続いていたというのを聞いていたんで、何も説明もせず一言、奥さんつらいねえと言ったそうなんですね。奥さんはその場では泣き崩れたんだけれども、もう二度とその質問はしなくなった。

要するに、その奥さんが聞きたかったのは薬の効用なんかではなかったということですよね。なぜ自分の夫だけががんに冒され死んでいかなきゃいけないのかを誰かに訴えたかった。誰かに問いかけたかったわけです。

この問いへの答えを近代科学は持っていないですね。近代医学は持っていません。科学はＨｏｗやＷｈａｔについては答えられるんですけど、Ｗｈｙ、なぜについてはあんまり答えられないんですね。大ざっぱに答えられますよ。この人、たばこ吸い過ぎでしたとか、この人、食生活が悪かったとか。でも、同じだけたばこを吸っていてもがんになる人もいればならない人もいますよね。じゃあ、奥さんつらいねと言ったところでがんが治るかといったら、それは治りません。治りませんが、御承知のように、ホスピスというのはがんを治す医療機関ではないんですね。治らないがんの患者さんとその御家族に残り半年間を充実して過ごしてもらうための医療機関です。だとすれば、その患者さんや御家族がどう生きたいのかを酌み取らないと、治療には当たれないわけです。こっちが患者さん、こっちが医者だと思ってください。

でも、想像してもらえば分かると思うんですけど、余命半年と言われて、じゃあ残り半年間、こうこうこう過ごしたいですと理路整然と言ってくださる患者さんや御家族のほうがまれですよね。泣いたりわめいたり、パニック状態になったり、何でこの薬使うんですかと逆ギレされたりする。でも、その中からコンテクストを酌み取らなきゃいけない。大変な仕事ですね。

私、実際、大阪大学に十数年前に呼ばれたときに、医学部出身の副学長からこういうふうに言われました。昔は医者や看護師なんていうのは、病気やけがを治してあげればみんなから感謝されたと。貧乏だけど誇り高いいい商売だったと。今はもう医療が高度化し過ぎて、何をもって治したというのかさえ誰も分からなくなっている。要するに、１分１秒でも延命したいのか、痛みを緩和したいのか、家族と一緒にいたいのか、仕事にちょっとでも戻りたいのか、独りでひっそり死にたいのか。１人の患者さんの中にも複数のお気持ちがあるわけです。もう家族なんてみんなばらばらです。

あと医療コミュニケーションの難しいところは、患者さんのお気持ちも変わるんですよね、途中で。どんどん変わっていく。その中からでもコンテクストを酌み取らないと、意図を酌み取らないと治療法を決められないんですよね。科学が発達すれば発達するほど治療法のオプション、薬のオプションはどんどん増えていきます。でも余命半年ですから、いろいろ試してみるというわけにはいかないんです。もちろん、これを選ぶのもコンピューターは今すごく手助けをしてくれます。でも、その手助けというのは過去の、この症状だったら統計上この薬が一番効きますよというアドバイスでしかない。その治療法や薬がその患者さんや御家族が望んでいるものかどうかを決めるのは、まだ人間である医師や看護師しかできないんですね。ここに恐らく人間に残された最後の領域があります。

どんな人工知能の学者に聞いても、人間と同じだけのコンテクスト理解ができるコンピューターやロボットはあと30年、50年は無理だろうと言われています。要するに、将棋や囲碁で勝つなんていうのは簡単なことなんですけど、奥さんつらいねえと言ってくれるコンピューターはまだできないというか、コンピューターにそんなことを言われたくないで

すしね。

そうすると、やはり子育てや教育や、看護や介護は最終的には人間に頼らざるを得ない。ですから、皆さんはすごくいい職業を選択したわけですね。教育というのは恐らく生き残っていくでしょう。なぜなら、子供や患者さんに代表される社会的弱者はコンテクストでしかしゃべらないからです。小さいお子さんとふだんから接している方は分かると思うんですけれども、子供は全然関係ないことで気持ちを伝えてきますね。大人から見ると、平田先生が好きなら平田先生が好きって言えばいいじゃんと思うんだけど、それを宿題の話で伝えてきたりするでしょう。

私、小学校２年生と学校でワークショップをしていたときに、体育館でやったんです。すごい盛り上がったんですね。キャッキャキャッキャ言って。みんなすごい笑顔だったんですけど、１人、急に泣き出しちゃったんですね。あれ、何かやっちゃったかなあと思って、あるいは何か陰でいじめでもあるのかなあと思ったんですけど、先生がぱっと私のところへ寄ってきて「大丈夫です。今、この子うれしいんです」と言って。これは分からないですよね。泣いている小学校２年生がうれしくて泣いているのか悲しくて泣いているのか、人間だって分からないです。これが分かるコンピューターの開発はあと100年ぐらいかかると思います。でも、ふだんからその子に寄り添っている親や教員はこれが分かるということなんですね。これが恐らく人間に残された最後の領域ではないかと思います。

ただ、こういう話をすると、若い学生さん、真面目な方が多いんで、それ難しいそうとか、できるかなあと思われるかもしれませんが、私たちはこのコンテクスト理解のサイクルをふだんは普通に回しています。

例えば、皆さん、名古屋の駅前とかで18歳の男の子が17歳の女の子にボウリングに行こうよと誘っていたとします。それをたまたま皆さんが立ち聞きしたとします。ボウリングに行こうよというのを立ち聞きして、ああこの男の子、本当にボウリングが好きなんだなあと思いますか。思ったらよっぽど野暮な人ですよね。これどう見てもデートに誘っているんでしょう。女の子が、えー、ボウリングと言ったら、じゃあ映画にすると言いますよね。ボウリングじゃなきゃ嫌だと言ったら、こいつは振られますよね。

でも、これコンピューターは全く分からないんです。ボウリングに行こうよに好きも嫌いも入っていないでしょう、情報として。こういうのを情報価値判断というふうに言います。コンピューターは情報をフラットに扱います。人間は価値判断してから情報を扱います。だから早い。でもよく間違える。これが人間のコミュニケーションの大きな特徴です。

私たちは、ふだんはそういうコンテクスト理解のサイクルを回しているんですが、ビジネスの現場や教育の現場のように時間が限られていたり、医療の現場のようにパニック状態が起きやすかったりすると、このコンテクスト理解のサイクルが妨げられてコミュニケーション不全が起きるということなんですよね。

じゃあどうすればいいかということなんですけど、ちょっともう一回戻ってみましょう。

皆さんが受けてきた国語教育とかですと、「旅行ですか？」と発話するのはＡさんですから、Ａさんが一生懸命言い方を考えてきます。例えば、国語の朗読の時間だったら、気持ちを込めて丁寧に読みなさいと先生は指導してきたと思います。あるいは、演劇だったらば腹式呼吸できれいに言うとか、体を鍛えたパワーとスピードで言うとか。丁寧もきれいもパワーもスピードも、全部Ａさんの努力、あるいはＡさんの能力に関わってきました。

でも、現実の世界はどうでしょう。先ほど皆さんに聞いて分かったように、話しかけるかどうかの大きな要素は相手によるんでしたよね。でも、このＣさん役の人は困りますよね。話しかけられやすい演技って何っていうことになります。これ体を鍛えてもだめですよね。体を鍛えて頑丈になっては話しかけにくくなっちゃいますから。

そこで、こういったものを関係や場の問題として捉えていこうというのが90年代以降に出てきた新しいコミュニケーション教育の考え方です。発話しやすいような関係ができているの、発話しやすいような場づくりができているのということです。これは教育学でもよく言われることですよね。要するに、意見を言いなさいといっても意見が出ないのは、生徒個人の問題だけではなくて、そういう場づくりができているかどうかを問うということです。

再三名前が出てきている大阪大学の私はコミュニケーションデザインセンターというところにいたんですけれども、

このセンターは世界でも珍しいそういった哲学、そういった理念で生まれた教育機関でした。私たちは、ぺらぺらと説明のうまい医者や科学者を育てたいわけではなかったんですね。もちろん説明はうまいにこしたことはないけれども、説明だけでは駄目だというのはさっきのホスピスの例でお分かりになると思います。

それより大事なことは、Aが医者でCさんが患者だったとすると、この説明能力は大事です。でも、もっと大事なのは患者さんがお医者さんに質問がしやすいような椅子の配置になっているかどうかとか、壁の色はどうかとか、天井の高さはどうかとか、受付から診察室までの道のりが患者さんを緊張させていないかどうかとか、これ全部デザインの問題ですよね。あるいは、医療過誤が起きにくいような組織になっているかどうか。事故が起きたときに、下から上にちゃんと情報が伝わるかどうか。これは組織や情報のデザインの問題です。

もっと広げていくと、病院の建物自体が患者さんを威圧していないかどうか。これ建築のデザインの問題になってきます。あるいは、もっと広げていくと、病院はまちのどこにあればいいの。交通アクセスは何がいいの。これまちづくりとか交通行政のデザインの問題になってきます。患者さんがお医者さんに質問がしにくいのは、お医者さんが威張っているからじゃなくて、患者さんがバス３台も乗り継いできてへとへとになっているからかもしれない。

原因はどこにあるか分かりません。これ原因と結果を一直線に結びつけない考え方を学問の世界で複雑系といいますよね。

コミュニケーションの問題を複雑系の視点で捉えたのがこのコミュニケーションデザインという考え方です。説明の問題だけではなくて、コミュニケーション個人の問題だけに捉えるんではなくて、デザインが間違っているんじゃないかと考える。

これここまでお話しすれば、先ほど申し上げたように教育、教室づくりも全く同じ課題があるということですよね。ただ単にアクティブラーニング、アクティブラーニングといっても、そのアクティブになるような環境づくりができているかどうかが非常に大事になってくる。

例えば、医療コミュニケーションの世界でも、これは香川県の善通寺というところにある国立の小児病院です。見るからに建築のデザインから、子供たちが親しみやすく病院に来ることを怖がらないような設計になっている。こういったことがこれからの学校や病院には求められていくんではないかということです。

まずワークショップの際には、実際のワークショップの進行はどうするかというと、例えばこの高校生のA君が、あんまりうまく「旅行ですか？」と言えなかったときに、A君がサッカーが好きだったら、Cさんにサッカーの雑誌とかを持ってもらいます。「サッカー好きなんですか」「ええ、まあ」「どうですかね、代表チームは」「頑張ってほしいですね」「ところで今日は旅行ですか」とかだと結構言えるようになるんですね。まだ中学生とか高校生とか、人生経験の浅い段階で「旅行ですか？」というセリフでつまずいたときに、そのセリフだけ考えさせてもなかなかうまく言えないですね。でも、皆さん、図形の問題を解くときに補助線を引くというのをやったと思うんですけど、この補助線を引いてあげるとイメージがつかみやすくなる。ほら、言えるじゃないという感じなんですね。

そうなんですけど、でも実際には経験の浅い指導者、演出家ほど、ほら話しかけるときの気持ちになってごらんというふうに言っちゃうんですね。でも、話しかけないんですもん、高校生。皆さんだって、チェーホフのお芝居に出ることになって、ほらサモワールでお茶を入れるときの気持ちになってごらんと言われても困るでしょう。これはあまりにイメージが遠いから、いやうち、ちょっとティーバッグでしか入れていないんでと言えるんですけど、「旅行ですか？」というセリフはなまじ意味が分かっちゃうから言えない自分が悪いような気になって、どんどん追い詰められていってしまうんですね。

さあ、ここが教育を志す皆さんにとっては非常に重要なポイントです。話しかけるときの気持ちになってごらんという問いかけは、ふだんから話しかける子や従来型の学力、頭の回転の速い子にしか適用できないんですけど、「話しかけたことある？」とか、「どんなときなら話しかける？」とか、「相手がサッカーの雑誌を持っていたらどう？」という問いか

けならば、どんな子供にでも成立するんですね。

こういった考え方をシンパシーからエンパシーへ、あるいはシンパシー型の教育からエンパシー型の教育へといいます。これ訳語が同じようなものが出てきてしまうんですけど、私は同情から共感へ、同一性から共有性へというふうに訳していきます。

日本では、演じるというと役になり切るとか乗り移るみたいな、役に同化するイメージがあるんですけど、そうではなくて、プロの俳優がやっている仕事もそうではなくて、ふだんは話しかけない自分だけれども、話しかけるとしたらどんな自分だろうかということを考えて、共有できる部分を見つけて、そこから少しずつ役に近づいていっているわけです。

これ一番分かりやすいのは、いじめのロールプレーです。皆さんもやったことのある方はいらっしゃると思いますけど、これも経験の浅い先生ほど、ほら、いじめられた子の気持ちになってごらんとすぐ言っちゃうんですよね。でもちょっと考えれば分かると思うんですけど、いじめられた子の気持ちがすぐ分かるんならいじめないですよね。いじめられた子の気持ちが分からないからロールプレーやるのに、一番最初からいじめられた子の気持ちになってごらんというのは、これは無理なんです。

でも、いじめっ子の側にもほかの人から何かされて嫌だった経験とかはあるはずなんですよね。だから、１週間前にＡ君から何かされて嫌そうにしていたのと、さっきのＢちゃんと似ているよと、ちょっと会話の回路が開けてきます。もちろん小学生なら100％反論するでしょうね。違うもん、あれはＡが絶対悪いんだもん。さっきの、俺は遊んでいただけだもん。でも、こう言ってくれれば教員の側としてはチャンスなんですね。そうかなあと。先生から見るとすごく似ていたけど、じゃあどこがどう違ったんだ。君にとっては違うんだよね。じゃあどこがどう違ったのか考えてみよう。Ａちゃんにとってのいじめといじりと遊び、Ｂ君にとってのいじめといじりと遊び、そして君にとってのいじめといじりと遊びはどこがどう違ったんだろう。まさにコンテクストがずれていたわけですよね。君は遊びのつもりだったけど、Ｂちゃんはいじめと受け取ったんだよと。

日本のいじめ問題の初期段階はほとんどがこのコンテクストのずれによって起こります。コンテクストのずれは言葉だけではなくて、身体的なコンテクストのずれも含めてです。

決して演劇をやればいじめがなくなるとは思いませんが、こういったコンテクストをすり合わせる習慣を身につけることによっていじめが起きにくいような環境、あるいは企業で言えばハラスメントが起きにくいような環境がつくれるんじゃないかというのが私たちの基本的な考え方です。

御存じの方も多いかと思いますが、欧米では演劇教育は普通に学校教育の中に取り入れられています。少なくとも、普通の先進国は中学、高校の選択必修に演劇が入っています。皆さんは音楽と美術と書道だったと思うんですけれども、普通の国は音楽と美術と演劇なんですね。特に、その中でも演劇の目当ての一つにこの異文化理解、異なる価値観を持った人への理解というものがあります。シンパシーというのはかわいそうな人がいたら、ああかわいそうだなあと思う。同情ですね。これは自然に出てくる感情。これも情操教育としては大事なんですが、エンパシーというのは異なる価値観、異なる文化的な背景を持った人の言動を理解しようとする態度や技術です。これを培うのには演劇は非常に有効なんではないかということなんですね。

何でこの人、今「旅行ですか？」と話しかけたんだろう。俺なら絶対話しかけないのになあと。何でこの人は今話しかけないんだろう、俺なら絶対に話しかけるのになあと。これを役を演じてみることによって、その違和感から出発して、ああなるほど、こういうことでこの人は今話しかけたんだなあというふうに納得する。これが欧米では演劇教育の最も重要な役割と考えられています。

日本もこれから多文化共生社会になっていく過程では、やはりこういった授業が今後増えていく、増やしていかなきゃいけないんじゃないかということです。

さて、私は劇作家で話し言葉を書くという特殊な職業をしているんですが、話し言葉っていろいろありますね。その中

でも、今日の一つのテーマである対話と会話をきちんと区別する必要があるんじゃないかというふうにずうっと言ってきました。対話はダイアログですね。会話はカンバセーションで、はっきりとした違いがあるんですが、日本語ではあまり意識されてきませんでした。というよりも、対話の概念が弱いということですね。ダイアログを対話と訳してしまったために、日本語の辞書を引くと、向かい合って話すこととか一対一で話すことというふうに出てきます。英語の辞書だと全然違う解釈になっています。

私なりの定義は、会話というのは親しい人同士のおしゃべり、対話というのは知らない人との間の情報の交換や、知っている人同士でも価値観が異なるときのすり合わせを対話と呼ぶということなんですね。

日本社会はこれまで島国、村社会でほぼ同質のライフスタイルとかを持った人間が分かり合う、察し合う。そこはちょっと分かってと。そこはちょっと察してよと、そういう文化を築いてきたわけですね。一方で、ヨーロッパというのは異なる価値観、異なる文化的な背景を持った人が背中合わせで暮らしていますから、自分が何者であって、何を愛し、何を憎み、どんな能力を持って社会に貢献できるかをきちんと説明しなきゃいけない文化です。これも文化の違いなんで、よしあしではないし、まして優劣ではないと私は思っています。

私たちは、この分かり合う、察し合う文化の中で優れた芸術を生み出してきました。俳句や短歌のような世界で最も短い詩の形を生み出してきました。「柿くへば鐘が鳴るなり法隆寺」と言っただけで、皆さんは何となく夕暮れの斑鳩の里の風景を思い浮かべることができる。これはすごい能力なわけですよね。こういう社会のことをハイコンテクストな社会といいます。コンテクストを酌み取りやすい社会です。

当然、多民族国家はローコンテクストになります。きちんと言葉で説明しないと分かり合えない社会です。別にそれはよしあしではないし優劣ではない。

ただ国際社会に出たときには、この日本の文化、分かり合う、察し合う文化は少数派だという認識は必要です。そうじゃないと、国際社会に出たときにやっぱり日本人は変わっているよねとか、あいつらは全然しゃべらないで気持ち悪いよねで終わってしまうから。

しかも、少数派が有利な点もあります。例えば、私が生きているような芸術の世界ですね。私に世界中の劇場や大学から仕事の御依頼が来るのは、私が日本語で書き、日本文化を背負っているからです。私に背負っているものが何もなければ、パリなんていうのは世界中からアーティストが来るので、英語の下手なやつ、フランス語もできない駄目なやつという扱いになると思うんですけど、私は彼らの持っていないものを持っていて、それを彼らの文脈で説明したり作品にする能力があるのでいろんなところから御依頼を受けるということなんだと思うんですね。重要なことは、自分の文化を大切にしながら、それを相手の文脈で説明していくということです。

さて、今日は女子の学生さんも多いと思うので、ちょっとせっかくなので別の話もします。

この言葉というのは人工的につくられるものなんですね。会話というのは自然状態で起こるんですけど、演説の言葉とかスピーチの言葉とか、大学の授業の言葉というのはほぼ明治期に人工的につくられました。旧帝国大学、最初の十数年は全ての授業が英語かフランス語かドイツ語でしたが、ここが明治の日本人のすごいところで、ほとんどの授業を教科書も含めて日本語でできるようにしました。政治の言葉もつくったし、裁判の言葉もつくった。

しかし対話の言葉はつくってこなかったわけですね。これ、理由は簡単です。富国強兵とか、戦後復興とか高度経済成長とか大きな国家目標があって、そこに従っていれば多くの人が幸せになれるような社会では異なる価値観をすり合わせる言葉というのは生まれてこないわけですね。

結果としてどうなったかというと、例えば、日本語では対等な褒め言葉が少ないというふうに言われています。今日、英語科の方とかはお分かりになると思うんですけど、英語とかフランス語にはそういう言葉がたくさんありますね。マーベラスとかワンダフルとか、トレビアンとか、アンビリーバブルとかいろいろある。日本語はないんですね。上から下に、よくやったみたいなのと、下から上に、すごいですねみたいなものはあるんですけど、対等な褒め言葉は非常に少ない。

だから、それをつくろうとすると和製英語とか外来語に頼らざるを得なくなる。ナイススピーチとか、ナイスショットとかです。これは訳せないですね。

１つだけすごく汎用性の高い対等な褒め言葉があるんですね。これは「かわいい」です。皆さん、年上の人にも「かわいい」は使えますよね。よく私も含めた中高年の男性が若い女性に、君たちはボキャブラリーが少ないなあ。何でもかわいい、かわいいで済ませてと言うんですけど、ボキャブラリーの少ないのは私たちのほうなんですね。この対等な褒め言葉が少ないという日本語の欠点を「かわいい」は随分補ってきたということです。

ほかにもこういう問題があります。例えば、女性の上司と男性の部下という関係、今は日本社会でも普通になってきましたが、日本の女性の上司が男性の部下に命令する定まった日本語ってまだないんですね。

あるいは、先ほどの医療コミュニケーションの世界でいうと、中高年の男性入院患者が若い女性の看護師に子供扱いされたと言ってクレームがつくことが結構あるんですね。でもこれはしようがないんです。日本語の二千数百年の歴史の中で、女性が男性に命令する、指示するという関係はお母さんが子供に命令する、指示するという関係しかなかったわけですね。

法律ができて、社会はだんだん変わっていきます。まだまだ日本は諸外国に比べれば劣っているとはいえ、雇用機会均等法ができて三十数年、女性の社会進出は随分進みました。でも、まだ言葉の変化は追いつかない。言葉というのは保守性があるので、ちょっと変化が遅くなります。

例えば明治維新が1868年に起こって、四民平等、努力をすれば出世できる、身分を超えた恋愛、そういうことが可能になったわけですけれども、１つの日本語でけんかをしたり政治の話ができたりするようになるのは大体1910年前後と。言文一致の完成を待たなくてはならない。50年ぐらいのタイムラグが起こります。

今、この女性の話し言葉ですね。これ非常に大きな問題になっています。例えば、私、海外での日本語教育のお手伝いもしているんですけど、海外で日本語を母語としない方に日本語を教えるときに、この女性の話し言葉をどう教えるか常に議論になっています。あまり過度にこれを押しつけてしまうとジェンダーギャップを固定することになる。しかし、外国の方で日本に留学するような方は、やっぱりコンビニとかファミレスでバイトしますから、ある程度そういう言葉は覚えておかなきゃいけないんじゃないかという議論があります。

例えば、男性の上司が男性の部下に「これ、コピーとっとけよ」、ちょっときつく聞こえるかもしれないですけど、これだけでハラスメントになることはないですよね。しかし、女性の上司が男性の部下に「これ、コピーとっとけよ」と言ったら、相当きつい人に取られてしまいますよね。これ明らかに女性差別なんです。同じことを言っていてもきつく取られてしまう。でも言語というのは保守性が働くので、こういうことが起こります。「これ、コピーとっといて頂戴ね」、これは女性だけが使いますね、ほとんど。「これ、コピーとって」でもいいんですけど、やっぱり一番いいのは「これ、コピーとってください」です。全員が丁寧にしていく。だったら、変わらなきゃいけないのはどっちでしょう。変わる距離が一番遠いのはどっちでしょう。それは私たち中高年の男性です。私たちが言語的な権力を放棄しないといけない。あるいは痛い目に遭って変わらざるを得ないということですね。そういう過渡期に今私たちは生きているということです。

コロナがあって、スペイン風邪のことが随分話題になりました。この100年前というのは、世界史にとっても激動の時代でした。1919年３月１日に韓国では日本の植民地支配下の最大の抵抗運動である三・一独立運動というのが起こりました。それに刺激を受けて、中国でも五・四運動というのが起こりました。ベトナム建国の父、ホーチミンがパリでデビューをしました。パリで何があったかというと、パリの講和会議というのがあって、ウィルソンが民族自決という概念を提唱して、当然、韓国の方たちも自分たちも独立できるだろうと考えたわけですよね。

ちょっと今日はこの話ではないんですが、このパリの講和会議というのは世界で最初の全ての議事録が残っている会議です。これを主導したのは５つの戦勝国です。アメリカ、イギリス、フランス、イタリア、そして日本です。日本はこの五大国に入ったことに狂喜乱舞しました。それはそうですね。その十数年前の日露戦争の頃までは米と絹糸ぐらいしか

輸出品目のなかった貧乏国が、たった十数年で世界の一等国の仲間入りをしたわけです。百数十人の大外交団を派遣しました。これ全部、分科会まで記録が残っているんですけど、ギャグかと思うぐらいに日本代表団は発言をしないんです。どの分科会も、「日本代表団、何かございますか」「殊さらございません」で終わるんですね。どうも、何か変なことを言うと足元を見られるから、できるだけ発言するなというふうに指令が出ていたようです。イタリア代表団は、アドリア海の権益をめぐって紛糾し、怒って本国に帰ってしまいました。これがジブリの「紅の豚」のあの世界につながっていくんです。あれ最後はイタリア空軍が攻めてくるでしょう。

これすごく象徴的だと思うんですね。ドイツは敗戦国でいませんでした。イタリアは怒って帰ってしまいました。切れちゃった。そして、日本は何もしゃべらなかった。諦めちゃった。で、この３か国がその十数年後にもう一度ファシズムを生み、世界を戦争へと引っ張っていくわけですね。第２次世界大戦は、政治思想史的に見れば植民地競争に遅れて参加した３か国が起こした戦争ということになるんですけど、私のように言語に関わっている人間からすると、それは対話の言葉を持っていなかった３か国。要するに、切れない、諦めないというのが対話の精神なんですけど、すぐ切れる、すぐ諦める、あるいはいない、そういった対話ができなかった３か国が起こした戦争と言えるんじゃないか。

何でそうなったかというと、要するにこの３か国はほぼ同じ時期に国家統一をしています。これはイギリスやフランスから100年ぐらい遅れてということなんですよね。国家統一の過程で必ず言語の統一が起こります。これ日本はそれを急がなくてはならなかった。薩摩の将校の命令を津軽の兵隊さんたちが聞き取れなかったら、これ軍隊は負けてしまいますから急いだわけですね。急ぐということは、目的に向かって一直線に進んでいくということです。しかも英語やフランス語の成功例がありますから、それを輸入してどんどん裁判の言葉とかは翻訳すればよかった。そこでは、ですから対話の言葉はつくられなかった。対話の言葉は無駄だから。余計だから。いろんな価値のすり合わせなんていうのは時間がかかるから。で、この対話の言葉がつくれなかった３か国が大きな戦争を起こしてしまったんじゃないかということです。対話というのは、民主主義を守るための最も重要な要素だと。これをきちんと教育で学ばせる必要があるんじゃないかということです。

日本社会は、どちらかというと会話があっても対話がないと。それから、シンパシーがあってもエンパシーがない社会だと言えると思うんですね。その文脈でいうと、今回のコロナの問題でいうと、ハウスがあってもホームがないという問題があったんじゃないかと私は感じています。ステイホーム、ステイホームという言葉を政治家も経済人もジャーナリストも無邪気に使ったわけですけれども、ホームとハウスは違うわけですね。ハウスって物理的な家です。ホームというのは家族関係や人間関係も含めた帰るべき場所ですよね。だからホームは前置詞が要らないですよね。ステイホームになるわけですね。

野球でも、一周回って戻ってくるからホームベースなんですね。あれは攻め込んで１点取るサッカーのゴールとは違うわけです。でも、このニュアンスはステイホームと日本語で言ったときにはほとんど落ちてしまった。

例えば、一昨年の年末なんかですと、西村担当大臣は年末年始は家族と過ごしてくださいとずうっと言っています。じゃあ家族のない人はどうするんだということですよね。このハウスがあってもホームのない人たちのケアが足りなくなってしまって、その人たちがネットで凶暴化したり自粛警察のような流れになってしまったんじゃないかと。

もう一つ、その理由は、今回の災害が弱者のいない災害だったんじゃないかというふうに私は捉えています。あの東日本大震災のときには、東北の人々が家族や友人を失いながら、まだ寒い３月の避難所で粛々と列をなして救援物資を待ちました。その映像を見て、私たちはいたく同情し、募金を集めボランティアに駆けつけました。私たちははっきりとした弱者がいるときにはすごく同情する心優しい民族です、日本人は。でも、異なる価値観、異なる文化的な背景を持った人の行動を理解しようとする力がちょっと弱い。

今回、日本は感染者も比較的抑えられてきて死者も少なかったにもかかわらず、どうしてこんなに人心が荒廃してしまったのか。それは一番最初のクラスターが豪華客船であったり、ライブハウスであったり、あるいはホストクラブであっ

たりしたために、本来弱者であるはずの感染者さえも悪者扱いされてしまったと。

私たちが生きる演劇とか音楽とかライブエンターテイメント産業ですね。これ１兆円産業なんですけど、そのうちの7,000億から8,000億が溶けて流れてしまったと言われています。私だけではなくて、野田秀樹さんとか宮本亜門さんとか西田敏行さんとか、テレビで窮状を訴えてきました。訴えるたびにネットでたたかれました。命のほうが大事だろうとか、好き勝手なことを言うなとか、今まで勝手なことをやっていたくせにみたいにですね。

僕がずうっと言ってきたのは、それは命は大事でしょうと。命はみんなに等しく大事でしょうと。でも、命の次に大切なものは一人一人違いますよね。この命の次に大切なものを、他者が命の次に大切しているものを理解するのがエンパシーなんです。演劇なんて不要不急だというのは簡単なんですけど、そうじゃなくて、いや俺は演劇は見ないけど、君にとって演劇は命の次に大切なことは分かるよというのがエンパシーなんですね。このエンパシーを培うのには、芸術というのはどうしても必要なんですが、このエンパシーの足りない人には芸術が届かないというジレンマがあります。

憲法第25条を思い出してください。健康で文化的な最低限度の生活を享受する権利を私たちは国家から保障されています。これに26条、皆さんにとって最も重要な条項ですね。教育を受ける権利。これを合わせて生存権的基本権というふうにいいます。

今回は、健康をどうしても優先しなきゃいけなかったので緊急事態宣言が出て、行動の自由が制限されました。本来は制限してはいけない行動の自由が制限されました。それから、各家庭にマスクが２枚配られました。それから、最低限度の生活を守るために国民全員に10万円が配られたり、ＧｏＴｏトラベルとかいろんな支援が行われました。

でも、子供たちが教育を受ける権利、保障されたでしょうか。僕は全国一斉休校措置の解除後は、辞めた先生方とか全部呼び戻すぐらいの、予算倍増するぐらいの措置があってしかるべきだったと思うんですね。そういうことは行われなかった。

あるいは、文化を享受する権利、守られたでしょうか。僕は、全ての家庭にマスクを２枚配る政策がありならば、せめて全ての独り親世帯に絵本を３冊配るような政策があってしかるべきだったと思うんです。だって図書館さえ閉まっちゃったんだから。この読み聞かせとか絵本を読むということは、非認知スキルの向上に直結していて、その非認知スキルの向上が学校の成績にも相関性が強いということはもう明らかなわけですよね。そうすると、アマゾンで幾らでも本は買えるなんてもう非常に限られている層ですし、実際にはアマゾンでも売り切れになっちゃったんですね、絵本とかが。そうすると、これは国家が本来保障するべきなんじゃないかと。べきだったんじゃないかと。

ちなみに、フランス政府は数か月前に26歳以下の全ての国民に４万円の文化クーポンを配りました。これは映画を見に行ってもいい、音楽を聞きに行ってもいい、本を買ってもいい、漫画を買ってもいい。要するに、皆さん、大学生、遊びたい盛りの大学生、よく我慢してくれたと。よく国家の政策に協力してくれた。この４万円で遊んでくださいというクーポンです。これは日本のこの数か月行われた10万円の給付をどうするかという議論に比べると圧倒的にセンスがいいですよね。

私たちは、そういう文化的な事柄とか教育の視点を持って、こういった例えば給付金なんかも考えなきゃいけない時代に今来ているんではないかということです。

ちょっと駆け足になりましたが、質疑の時間も取るように言われているので一旦ここで終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

【司　会】　平田先生、どうもありがとうございました。

私も聞いていて、本当に伺いたい話を聞けたなあと思うんですが、一つ一つのことをかみしめながら考えていきます。

質疑応答の時間とさせていただきたいと思いますけれども、どなたか御感想、御意見など。

質疑応答部分については個人情報を含むため削除

【司　会】　それでは、少し時間も超過してしまいまして、本当にありがとうございました。

よろしいでしょうか。

ありがとうございます。

では最後、閉会の挨拶を杉浦理事より改めてお願いします。

【愛知教育大学理事（杉浦慶一郎氏）】　失礼します。

平田先生、本当にありがとうございました。

多分、Ｔｅａｍｓを含めて、聞いてくれた方それぞれの心の中に響く部分がたくさんあったんだろうなあと思います。コミュニケーションは人生を豊かにすると。そのとおりだろうな、そのとおりだなと思いながら聞きました。

私自身も学校の教員経験がある中で、子供たち、あるいは保護者が目の前にいていろんな言葉を発する。言葉だけではなくて態度であるとか表現、そういうものも含めていろんなことを発しているんですけれども、それがなかなか読み解けなかったなあ、適切な言葉がけができなかったなあということを今お話を聞きながら思っていました。意図を酌み取ることの難しさ、どうやって訓練したら、演劇をやればいいという今お話がありましたけど、この年になってからだとなかなか難しいのか。いやいやチャレンジすべきだろうと、すぐお話しいただけるんだろうと思いますけれども、今日、講演を聞いてくださった皆さんが、それぞれの人、目の前にいる人と対話する、コンテクストをきちっと捉えながら対応していくことができれば、もうちょっといい世の中になるんだろうなと思いました。

本当に今日は平田先生、ありがとうございました。ここで改めて、ここの会場にいる人、拍手でまずは平田先生に感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。（拍手）

【司　会】　ありがとうございました。

それでは、本日のＦＤ講演会をこれで終了させていただきたいと思います。

平田先生、ありがとうございました。